世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

大学生の学修・生活実態調査に関する考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 積田, 淳史, 渡部, 博志, 宍戸, 拓人
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/182

大学生の学修・生活実態調査に関する考察

積田淳史・渡部博志・宍戸拓人

1.　はじめに

本稿は、著者たちが独自に実施した質問票調査ならびにインタビュー調査を通じて得られた、大学生の学修ならびに生活の実態について考察するものである。筆者らは、筆者らが所属する経営学科（2015 年時点で、3・4 年生は政治経済学部、1・2 年生は経済学部）の学生を対象に、学修と生活の両面で広範な質問票調査を行った。調査結果の一部については、すでに学術的な面から国際学会で発表[1)] を行い、学内においても学修実態という面からすでに発表してきてはいる[2)] が、本稿では学内外における大学生のコミュニケーションという視点から、実態について考察を深めていく。また、学修成果の高い学生に対するインタビュー調査から得られた気づきについても紹介したい。

これまでにも大学生を対象とする調査は様々な形で実施されてきている。しかしながら、筆者らが概観する限り、それらの調査には幾つかの限界があるために、必ずしも鮮やかに学生の実態を描いてはいないと思われる。第一に、サンプルの限界が指摘できる。多くの調査は任意提出形式であることから、大学の調査に肯定的な学生たちにサンプルが偏っていることが指摘できる。あるいは特定の授業を対象とする調査では、その科目の受講者という偏りが生じている点も限界の一つである。第二に、テーマが限定的である。学生たちに負担を強いる調査であることから質問項目は厳選されるがゆえに、「探索的」な分析が難しい。第三に、インタビュー調査など定性的な情報が軽視されている点も指摘できる。例えばある施策を講じるときには、成果を生むかどうかに加えてそのメカニズムも検討する必要があるが、定量的な調査では限界がある。こうした問題意識に基づき、大学生の代表的な姿を実際に示すことの余地が残されているように思われ、筆者らは独自の大規模調査を企画したのである。

次節では筆者らが実施した質問票調査から得られた結果を紹介する。さらに実態に関する理解を深めるために筆者らが行ったインタビュー調査の結果を示しながら、第 3 節において調査を通じて得られた実態からの考察を行う。

2.　質問票調査

2.1.　概要

前節で述べた問題意識の下、学生の学修面ならびに生活面での実態を把握する目的で、筆者らが所属する経営学科の全学生を対象に「学修・生活の実態調査」と題して質問票調査を行った[3)]。調査は 2015 年 1 月 22 日から 2 月 3 日の約 2 週間にわたって実施し、有効回答は 247 名分であった。調査対象者に対する連絡ミスがあったため、多くの学生が自分たちは調査対象ではないと誤解したこともあり、この期間における回答率は 43.0% であった。

そこで、未回答者を対象に同年 4 月 7 日より 5 月 7 日までの 1 か月間に追加の質問票調査を行った。その結果、199 名の有効回答を追加で得て、調査全体の回答率は 77.6% に達した。

なお、実施期間の異なる回答が混在しているが、本稿では両者を統合して合計 446 名分を分析に用いた。本稿で対象としている学生のコミュニケーションについては数か月の間に劇的な変化が一般的には生じないと考えられる上に[4)]、調査期間によって回答傾向に大きな差がほとんど確認できなかったからである。なお、453 名からの回答を得たものの、全て同じ選択肢を選ぶなど明らかに真剣に回答していないと判断できる 7 名の回答は除外している。

また本調査の工夫として、任意ではあるが学籍番号および氏名を任意に記名させたことと、教員と同じ空間で回答させたことを指摘できる。これらの工夫は、GPA 等のアンケート外部のデータと統合して分析するねらいと、学生にしっかりと回答してもらいたいという狙いがあった。GPA 等のデータを関連させて分析することは学生に説明したが、回答した全学生が記名に応じてくれた。また、上述の通り真剣に回答していないと思われる学生はごく少数であった。

2.2. 概念と変数

本節では、学修成果として GPA という指標を用いながら、学修成果の優劣によって大学生のコミュニケーションに何らかの特徴が見られるのかについて考察していく。また、学修成果とは異なる側面として、能動的な活動を支える一要因と考えられる自尊感情（self-esteem）とコミュニケーションとの関係についても、質問票調査の結果から見られる傾向を考察する。

本稿では因果分析までは実施していないが、想定している概念間の関係は以下の通りである（図 1）。これらの想定は、「自尊感情（自分への自信や期待）や、特に友人との交友関係（コミュニケーション）は、学業に影響するのではないか」という著者らの経験的な仮説に基づいている。本稿ではこれら概念間関係の重要概念である「学修への取り組み」については必ずしも分析できていないが、これは今後の課題としたいと考えている。

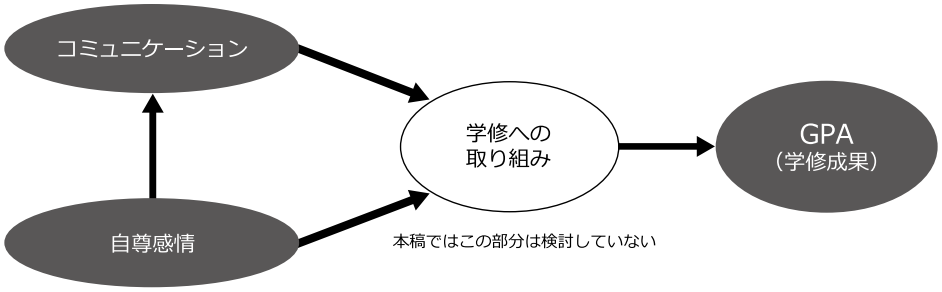

図 1　概念間関係の想定

①コミュニケーション

コミュニケーションに関する16項目は、7点尺度で測定した（1：まったく違う～4：どちらとも言えない～7：まったくその通り）。16の質問項目は、家族とのコミュニケーションに関する6項目と、友人とのコミュニケーションに関する10項目に大別される[5)]。今回の調査はコミュニケーションを構成する要因を検討することが目的ではないため、ここでは因子分析を実施せず、各質問を通じて明らかにされる実態そのものに注目して、学修との関係について分析を行った。

コミュニケーションに関する項目のうち、家族とのものを尋ねた6項目（表1内の①～⑥）では、対面での会話の他に、電話、メール、SNSやLINEなどのソーシャルメディアなどでの送受信もコミュニケーションに含む旨を定義した上で、回答者と家族とのコミュニケーションについて回答するように指示をしている。回答は前述の通り「1：まったく違う」から「7：まったくその通り」の7点尺度であり、回答値が大きいほど質問項目がより当てはまることを意味している。友人とのコミュニケーションについて尋ねた10項目（表内の❶～❿）も同様の7点尺度であり、回答時に各質問の文章がどの程度自分に当てはまるのかを答えるように指示している。

②自尊感情

自尊感情と学修成果との関係については既存研究も存在し、また著者らの仮説にも合致する。本稿では、GPAと自尊感情という既存研究の延長上にある分析に加え、自尊感情とコミュニケーションとの関係についても見ていくこととする。自尊感情については、Rosenberg（1965）で用いられている10項目を6点尺度の質問で行い、その平均値を計算することで算出している。

③学修成果（GPA）

学修成果としては、近年多くの大学でGPA（Grade Point Average）が一般的に利用されている。これは、授業科目の評価を数値化し、在学中の成績を平均値として示すことで学修成果を客観的に把握するものである。本学の場合、授業科目における成績評価は、高い方から順にS、A、B、Cという4段階であり、これに加えて不合格評価がある。この成績評価を高い順にそれぞれ4点、3点、2点、1点、不合格は0点として、この点数を各科目の単位数で加重平均したものがGPAである。

GPAにおいて不合格科目は0点として計算されるので、不合格科目が多いほどその加重平均値であるGPAは下がる。しかしながら、同じ低GPAでも、ギリギリ合格している科目が多い場合と、合格科目は比較的高い成績評価を受けながらも不合格となる科目もあることでGPAが低くなる場合とが混在する。すなわち、平均値であるGPAだけでは、履修科目がおしなべて低評価なのか、得意科目と不得意科目が混在しているのかという情報がわからない。換言すれば評価の分散はGPAだけからではわからない。そこで、学修成果について、不合格となった単位がどの程度あるのかという点についてもこの考察の中で取り上げていくこととする。

④記述統計

表 1 は、ここで用いる具体的な項目とその基本統計量（平均、標準偏差、度数）を示したものである。変数化された各項目を説明すると、次の通りである。学修成果である GPA は、質問票調査を行った年度の履修科目のみを対象にその計算した単年度 GPA の値と、入学時から通算での GPA の 2 項目を用い、いずれも理論的には上限が 4 点で下限は 0 点である。不合格単位割合は、入学時点からの総履修単位数に占める不合格単位の割合を百分率で算出したものである。自尊感情は前述の通り Rosenberg（1965）で用いられている 10 項目を使い、各文章が回答者にどの程度当てはまるかを「1：まったく違う」から「6：まったくその通り」の 6 点尺度で尋ねた。逆転項目の処理等を行った後、10 項目の平均値を算出し、その値が大きいほど自尊感情が強いことを示す変数としている。

全有効回答での基本統計量と、回答者の学年毎のそれとを併記しているのは、学年によって直面する環境が異なりうると考えられるからである。たとえば、回答者である経営学科の学生は、1 年生時は武蔵野キャンパスに通うが 2 年生以降はキャンパスを有明に移すため、サークル活動への参加は低くなる傾向が見られる。コミュニケーションという観点からは、3 年生の後半は卒業を意識し始める時期であり、就職活動を含めた将来のことを考え、家族や友人との会話が増加するかもしれない。このような学年による環境の違いが、そこで行われるコミュニケーションに影響を与え、自尊感情や学修成果との間の関係にも違いが見られるならば、その実態を捉える価値があろう。

実際、表 1 からは学年毎の違いが見られる項目が存在することが分かる。家族とのコミュニケーションでは、学年があがるほど自身の将来のことをよく話すようになる一方で、勉強については話さなくなる傾向にあることがわかる。友人の中でも、サークルの友人と一緒に過ごすことが学年と共に少なくなっていることは、先に述べたキャンパスが変わることに加えて、就職活動に向けてサークルで費やす時間が相対的に減少することと関係しているように思われる。友人と一緒に勉強することも学年と共に減っているのは、少なくとも現時点での学科専門科目の学習のスタイルというものが、より専門的になった勉強の内容を各自で身につける志向にあることを示していると考えられる。

2.3. 分析結果

このような学年毎の違いが見られる中で、学修成果や自尊感情の高低によってコミュニケーション行動に特徴は見られるのであろうか。項目間の相関という形でこの関係を見たものが表 2 である。表 1 と同様に、ここでも学科内の全有効回答を対象としたものと並べて、学年毎の相関についても示している。

①自尊感情と学修成果

今回の質問票調査では、自尊感情と学修成果との間にはほとんど相関がない。このように両者がほぼ無関係であることは調査対象の経営学科に特有の現象であるのか、それとも大学

表１　学修成果・自尊感情とコミュニケーションの基本統計量

		平均	標準偏差	度数
2014 年度単年度 GPA	全体	2.586	0.597	446
	1 年生	2.668	0.517	199
	2 年生	2.411	0.642	156
	3 年生	2.709	0.620	91
2014 年度終了時点総合 GPA	全体	2.566	0.519	446
	1 年生	2.670	0.516	199
	2 年生	2.457	0.512	156
	3 年生	2.524	0.499	91
不合格単位割合（%）	全体	5.493	8.046	446
	1 年生	3.836	7.388	199
	2 年生	7.666	8.760	156
	3 年生	5.389	7.318	91
自尊感情（10 項目）	全体	3.512	0.842	445
	1 年生	3.605	0.828	199
	2 年生	3.373	0.822	155
	3 年生	3.544	0.885	91
①大学の出来事を、家族とよく話す	全体	4.481	1.882	445
	1 年生	4.578	1.900	199
	2 年生	4.374	1.849	155
	3 年生	4.451	1.911	91
②大学外の出来事を、家族とよく話す	全体	4.735	1.754	445
	1 年生	4.768	1.721	198
	2 年生	4.686	1.817	156
	3 年生	4.747	1.736	91
③友人について、家族とよく話す	全体	4.534	1.778	446
	1 年生	4.538	1.772	199
	2 年生	4.590	1.759	156
	3 年生	4.429	1.839	91
④勉強について、家族とよく話す	全体	4.063	1.761	442
	1 年生	4.213	1.769	197
	2 年生	3.981	1.747	154
	3 年生	3.879	1.763	91
⑤自身の将来について、家族とよく話す	全体	4.148	1.784	446
	1 年生	4.050	1.880	199
	2 年生	4.199	1.713	156
	3 年生	4.275	1.694	91
⑥社会で起きる様々なできごとについて、家族とよく話す	全体	4.387	1.734	445
	1 年生	4.392	1.774	199
	2 年生	4.342	1.789	155
	3 年生	4.451	1.558	91

表１　学修成果・自尊感情とコミュニケーションの基本統計量（続き）

		平均	標準偏差	度数
❶同世代の平均的な学生と比較して、5歳以上年上の友人が多い	全体	2.822	1.612	443
	1年生	2.853	1.595	197
	2年生	2.748	1.598	155
	3年生	2.879	1.685	91
❷授業の空き時間などは、たいてい、いつも同じ友人達と過ごす	全体	5.502	1.520	446
	1年生	5.462	1.559	199
	2年生	5.532	1.504	156
	3年生	5.538	1.471	91
❸サークルの友人と一緒に過ごすことが多い	全体	3.020	2.000	443
	1年生	3.269	2.088	197
	2年生	2.948	1.847	155
	3年生	2.604	1.999	91
❹友人と一緒に勉強する	全体	4.169	1.797	444
	1年生	4.313	1.809	198
	2年生	4.219	1.759	155
	3年生	3.769	1.796	91
❺将来について、友人たちと意見を交換することがある	全体	4.399	1.720	446
	1年生	4.211	1.728	199
	2年生	4.365	1.753	156
	3年生	4.868	1.572	91
❻大学の友人より、大学外の友人と過ごす方が楽しい	全体	4.306	1.596	445
	1年生	4.424	1.699	198
	2年生	4.269	1.563	156
	3年生	4.110	1.402	91
❼大学・授業などでわからないことがあったとき、相談できる友人がいる	全体	5.395	1.441	446
	1年生	5.397	1.510	199
	2年生	5.308	1.484	156
	3年生	5.538	1.195	91
❽社会のできごとについて、友人たちと意見を交換することがある	全体	4.341	1.707	446
	1年生	4.291	1.760	199
	2年生	4.372	1.663	156
	3年生	4.396	1.679	91
❾サークルなど特定のコミュニティを共有しない友人と一緒に過ごすことが多い	全体	4.081	1.722	446
	1年生	4.226	1.776	199
	2年生	3.917	1.689	156
	3年生	4.044	1.646	91
❿ゼミ（プレゼミ）の友人と一緒に過ごすことが多い　※1年生は該当科目なし	全体	3.283	1.692	247
	1年生	–	–	–
	2年生	3.250	1.691	156
	3年生	3.341	1.701	91

自尊感情（10項目）は6点尺度。①～⑥ならびに❶～❿の質問項目は、7点尺度。

表２　学修成果・自尊感情とコミュニケーションとの相関

		2014 年度 単年度 GPA		2014 年度 終了時点 総合 GPA		不合格単位 割合（%）		自尊感情 （10 項目）	
2014 年度単年度 GPA	全体	1		0.933	**	-0.745	**	0.067	
	1 年生	1		0.999	**	-0.581	**	0.022	
	2 年生	1		0.923	**	-0.858	**	0.135	†
	3 年生	1		0.888	**	-0.781	**	-0.071	
2014 年度終了時点総合 GPA	全体	0.933	**	1		-0.717	**	0.062	
	1 年生	0.999	**	1		-0.578	**	0.022	
	2 年生	0.923	**	1		-0.819	**	0.121	
	3 年生	0.888	**	1		-0.778	**	-0.049	
不合格単位割合（%）	全体	-0.745	**	-0.717	**	1		-0.100	*
	1 年生	-0.581	**	-0.578	**	1		-0.041	
	2 年生	-0.858	**	-0.819	**	1		-0.161	*
	3 年生	-0.781	**	-0.778	**	1		0.008	
自尊感情（10 項目）	全体	0.067		0.062		-0.100	*	1	
	1 年生	0.022		0.022		-0.041		1	
	2 年生	0.135	†	0.121		-0.161	*	1	
	3 年生	-0.071		-0.049		0.008		1	
①大学の出来事を、家族とよく話す	全体	0.077		0.057		-0.060		0.151	**
	1 年生	0.112		0.106		-0.074		0.126	†
	2 年生	0.028		-0.008		-0.064		0.193	*
	3 年生	0.067		0.016		0.023		0.116	
②大学外の出来事を、家族とよく話す	全体	0.044		0.013		-0.041		0.142	**
	1 年生	0.089		0.082		-0.052		0.086	
	2 年生	0.015		-0.047		-0.068		0.186	*
	3 年生	0.002		-0.050		0.056		0.174	†
③友人について、家族とよく話す	全体	0.087	†	0.057		-0.056		0.188	**
	1 年生	0.133	†	0.126	†	-0.081		0.139	*
	2 年生	0.133	†	0.057		-0.125		0.238	**
	3 年生	-0.035		-0.085		0.111		0.227	*
④勉強について、家族とよく話す	全体	0.118	*	0.118	*	-0.079	†	0.186	**
	1 年生	0.180	*	0.178	*	-0.125	†	0.242	**
	2 年生	0.094		0.084		-0.055		0.176	*
	3 年生	0.037		-0.010		0.026		0.066	
⑤自身の将来について、家族とよく話す	全体	-0.020		-0.038		0.010		0.231	**
	1 年生	0.038		0.037		-0.052		0.259	**
	2 年生	-0.102		-0.143	†	0.078		0.220	**
	3 年生	0.025		-0.002		-0.021		0.219	*
⑥社会で起きる様々なできごとについて、家族とよく話す	全体	0.044		0.014		-0.013		0.154	**
	1 年生	0.137	†	0.135	†	-0.063		0.163	*
	2 年生	0.033		-0.045		-0.005		0.165	*
	3 年生	-0.143		-0.191		0.112		0.114	

表２　学修成果・自尊感情とコミュニケーションとの相関（続き）

		2014 年度 単年度 GPA		2014 年度 終了時点 総合 GPA		不合格単位 割合（%）		自尊感情 （10 項目）	
❶同世代の平均的な学生と比較して、5 歳以上年上の友人が多い	全体	-0.235	＊＊	-0.257	＊＊	0.160	＊＊	0.072	
	1 年生	-0.269	＊＊	-0.268	＊＊	0.076		0.085	
	2 年生	-0.241	＊＊	-0.240	＊＊	0.199	＊	0.076	
	3 年生	-0.234	＊	-0.306	＊＊	0.313	＊＊	0.029	
❷授業の空き時間などは、たいてい、いつも同じ友人達と過ごす	全体	0.120	＊	0.084	†	-0.138	＊＊	0.036	
	1 年生	-0.002		-0.005		-0.010		0.054	
	2 年生	0.158	＊	0.131		-0.179	＊	0.064	
	3 年生	0.318	＊＊	0.246	＊	-0.400	＊＊	-0.035	
❸サークルの友人と一緒に過ごすことが多い	全体	0.015		0.015		-0.055		0.131	＊＊
	1 年生	-0.191	＊＊	-0.189	＊＊	0.125	†	0.128	†
	2 年生	0.143	†	0.155		-0.166	＊	0.198	＊
	3 年生	0.191	†	0.184	†	-0.190	†	0.019	
❹友人と一緒に勉強する	全体	0.047		0.022		-0.085	†	0.078	
	1 年生	-0.083		-0.083		0.032		0.038	
	2 年生	0.172	＊	0.145	†	-0.201	＊	0.136	†
	3 年生	0.110		0.006		-0.106		0.069	
❺将来について、友人たちと意見を交換することがある	全体	0.166	＊＊	0.105	＊	-0.211	＊＊	0.145	＊＊
	1 年生	0.018		0.022		-0.155	＊	0.192	＊＊
	2 年生	0.268	＊＊	0.237	＊＊	-0.260	＊＊	0.130	
	3 年生	0.259	＊	0.141		-0.321	＊＊	0.088	
❻大学の友人より、大学外の友人と過ごす方が楽しい	全体	-0.022		0.026		0.106	＊	-0.093	†
	1 年生	0.219	＊＊	0.225	＊＊	-0.062		-0.110	†
	2 年生	-0.210	＊＊	-0.185	＊	0.234	＊＊	-0.101	
	3 年生	-0.188	†	-0.154		0.242	＊	-0.063	
❼大学・授業などでわからないことがあったとき、相談できる友人がいる	全体	0.176	＊＊	0.154	＊＊	-0.177	＊＊	0.102	＊
	1 年生	0.076		0.074		-0.036		0.081	
	2 年生	0.278	＊＊	0.281	＊＊	-0.339	＊＊	0.129	
	3 年生	0.159		0.107		-0.154		0.086	
❽社会のできごとについて、友人たちと意見を交換することがある	全体	0.048		0.018		-0.122	＊	0.210	＊＊
	1 年生	0.037		0.035		-0.166	＊	0.283	＊＊
	2 年生	0.130		0.101		-0.110		0.147	†
	3 年生	-0.058		-0.143		-0.086		0.167	
❾サークルなど特定のコミュニティを共有しない友人と一緒に過ごすことが多い	全体	0.031		0.048		-0.049		0.061	
	1 年生	-0.026		-0.025		-0.012		0.030	
	2 年生	0.074		0.127		-0.090		0.122	
	3 年生	0.000		0.010		0.038		-0.014	
❿ゼミ（プレゼミ）の友人と一緒に過ごすことが多い ※ 1 年生は該当科目なし	全体	0.119	†	0.106	†	-0.075		0.029	
	1 年生	–		–		–		–	
	2 年生	0.160	＊	0.135	†	-0.099		-0.001	
	3 年生	0.039		0.051		-0.020		0.070	

＊＊ 1% 有意、＊ 5%有意、† 10% 有意（両側検定）
自尊感情（10 項目）は 6 点尺度。①～⑥ならびに❶～❿の質問項目は、7 点尺度。

での学修という広範なものを対象にしたときに一般的に見られる傾向のものなのかについては、比較できるものがないため言及することは難しい。ただし、本学の経営学科では大学の方針に則りコアカリキュラム化が推進される形で科目数が絞られていることから、かなり異なる知識体系のものを多様に学修しなければ卒業要件を満たせない状況にある。そのため、領域による得手不得手が混在し、たとえば、会計とマーケティングといった他大学ではそれぞれに専攻学科が並列する分野をどちらとも履修することになるため、全ての領域にわたって同じような学修成果を得ることが一般的に難しいことで、自尊感情との関係が見られない可能性を指摘することができるように思われる。

②家族とのコミュニケーション

家族とのコミュニケーションの項目（表内の①～⑥）に着目すると、家族とよく話す学生は自尊感情も高い傾向にある。この傾向は、一部例外もあるものの学年の違いや会話の内容によらず全般的に見られる。しかしながら、家族と話す頻度の違いと学修成果との間に統計的に有意な関係はほとんど見られない。

例外的に「勉強」についてよく話す場合にはGPAも高いことが示されているが、これはコミュニケーションが学修成果を向上させるというよりもむしろ、成績が良かった場合に家族に報告することのあらわれかもしれない。教員としての素朴な直観としては特に両親と学生の関係性は様々な方面に重大な影響を及ぼすと思われるが、学修面についてはそうではない可能性が指摘できる。本調査結果に基づくならば、少なくともGPAに関する限り、家族とよく話をするよう促すことは必ずしも有効な助言になるとは限らないことは指摘できよう。

③友人とのコミュニケーションと自尊感情

友人とのコミュニケーション項目（表内の❶～❿）に目を移せば、項目によって学修成果や自尊感情との関係に違いが見られるだけではなく、学年によってもその関係の特徴が異なる点が見られる。

たとえば、自尊感情との関係では、項目によって統計的に有意な関係が見られるものと見られないものとが分かれ、家族とのコミュニケーションの場合には全般的に正の関係がみられたこととは異なる結果である。有意水準は低いものの、大学の友人より、大学外の友人と過ごす方が楽しい学生ほど、自尊感情が低い傾向が見られる点は、他の項目では見られない特徴的な点として指摘できる。大学内のコミュニティーで息苦しさを感じ、学内の生活になじめていないことが原因で自分に対して自信が持てないのだとすれば、学内に居場所をつくる、とりわけ1年次にそのような施策を講じる必要があるかもしれない。

今回の調査対象となっている学科の学生は、2年次以降修学キャンパスが移るため、1年次は同学科の上位学年がキャンパス内にいない環境である。学科の先輩から大学生活のアドバイスを得ることができないため、高校生までとは大きく異なる環境の中での戸惑いを自分たちで解消しなければならない。どうすればいいのかが分からず、そのような中で形成される大学内のコミュニティーになじめないことが大学外の友人と過ごすことを促しているのだとすれば、学修面ではなく生活面における高大接続を検討する余地もあろう。ただ、入学初

年時が重要だとして同学科の先輩後輩がキャンパスで交流できる仕組みを構築するとしても、キャンパスが物理的に分かれているため、それ自体が無理のない形で実施できなければ他の側面でひずみが生じるおそれもある。入学した大学での新たな生活になじみ、学内の友人と良好な関係が築かれるために大学側が何らかの手を打つ際には、全体最適の視点も欠かせないと思われる。

④友人とのコミュニケーションと学習成果

学修成果に焦点を移せば、単年度 GPA と入学からの通算 GPA、不合格単位の割合の 3 者が、友人とのコミュニケーションの各項目に対して基本的には同じ動きを見せていると言える[6)]。同世代の平均的な学生と比較して、5 歳以上年上の友人が多い学生ほど、学修成果は悪くなる傾向が見られる。大学生より 5 歳以上年上の者は、余暇の過ごし方が一般的な大学生のそれとは異なると思われ、友人としての付き合いの中で平均的な大学生であれば行わないような時間の使い方や行動を行うことが、学修に影響を及ぼしている可能性が考えらえる。5 歳以上年上であれば学生ではなく社会人として何らかの収入を得ていると考えるのが自然であり、大学生と比べて金銭面での自由度が高いと考えられる。したがって、学修成果が芳しくないこととの関係の背景には、そのような友人が多くいれば付き合いを続けるために可処分所得が多く必要となり、アルバイトを長時間することによって学修面に悪影響を及ぼすという可能性も考えられる。本稿では紹介していないが、月当たりの遊興費が多くなるほど GPA が低下するという有意な負の相関関係も本調査で確認できている。

⑤学内友人関係と学外友人関係

全般的に 3 つの学修成果は互いに似たような傾向を見せるものの、回答者の学年が異なると、他の学年の回答とは異なる傾向を見せる項目が存在する。とりわけ、1 年生に見られる傾向と 2、3 年生に見られる傾向が異なるものがある。

「サークルの友人と一緒に過ごすことが多い」と「大学の友人より、大学外の友人と過ごす方が楽しい」の両質問項目については、単年度 GPA でみる学修成果との間に、1 年生は負の関係がみられる一方で、2、3 年生については正の関係がみられる。統計的には高い有意水準が認められないものもあるが、入学以来の通算でみた総合 GPA と不合格単位の割合についても、1 年生にみられる傾向が 2、3 年生のそれとは反対になっている。すなわち、1 年生の段階では、成績が悪い学生ほどサークルの友人と一緒に過ごすことが多く、大学外の友人よりも学内の友人と過ごす方が楽しいという傾向が見られ、2、3 年生では逆にサークルの友人と一緒に過ごす学生ほど、また学内の友人と過ごす方が学外の友人と過ごすより楽しいという学生ほど、大学の成績が良い傾向にあるということである。サークルの多くは学内学生だと仮定すれば、両項目は学内コミュニティーで過ごすかどうかを暗示していると考えられる。これが 1 年次と 2 年次以降で学修成績との間に正反対の関係を示す点は興味深い。

この結果については、幾つかの理由を推測することができる。たとえば、1 年次に学内に深く溶け込んだ人間ほどサークルにのめり込み 1 年次成績を落とすものの、2 年次以降になると学内滞在時間や学内人間関係が提供する様々な便益が成績を向上させるという仮説を描

くことができる。1年次はこの効果が十分に発揮されないのは、1年次は科目選択の余地が極めて限られているカリキュラムのため、受動的に設定される科目を受講していればよい状況であったのが、2年次以降は主体的に履修科目を選択していくことを強いられることが影響しているのかもしれない。体調不良などで授業を欠席した際にノートを貸してもらうことや、履修規則や学科内でアナウンスされる情報の解釈を皆で確かめることの重要性が、おそらく2年次になると高まるからだろう。

また、この学内コミュニティーの存在が学年によって与える影響に違いを生じさせる別の理由として、既述した修学キャンパスの違いを指摘できる可能性がある。1年生にとっての先輩である2年生以降は、経営学科の場合は武蔵野キャンパスではなく有明キャンパスにいる。従って、先輩学生がもたらす影響が本格化するのが2年次以降になってしまうのかもしれない。このことは、仮に全学年が同一キャンパスに所属する学部学科の学生を対象とした調査と比較できれば、より詳細に判明できるかもしれない。

あるいは、様々な理由から不本意ながら本学科に入学した学生について想定することもできる。とりわけ、偏差値という観点からは本学よりも上位である大学に不合格であった結果として本学科に入学してきた学生たちには、行動に共通点があるようにも思われる。結果を受け容れられぬままに入学してしまうと、心理的に他の学生たちと同じと見なされたくないという働きが生じる可能性があり、それがサークルの回避や学外友人との接触に至るとともに、大学入学時点までの学力的優位性が解消する2年生以降で成績を落とすという仮説も立てられる。すなわち、自尊感情の際に指摘したことと同様の問題に直面しているといえる。

学科専門科目が本格的に展開される2年次以降、学内のコミュニティーで過ごすことと成績との間にプラスの関係がみられる項目は他にも存在する。たとえば、「授業の空き時間などは、たいてい、いつも同じ友人と過ごす」ことも学内コミュニティーがある意味で機能していることを示している。2年次のみに統計的に優位な関係がみられる「大学・授業などでわからないことがあったとき、相談できる友人がいる」ことも、互助関係が学内で形成されていることによる学修面でのメリットを明らかにするものと言える。学科専門領域の科目が展開されるタイミングの2年次のみ「友人と一緒に勉強する」ことが学修成果と正の関係を示すことも、同様のことを意味していると考えられる。

以上のことから、学内の友人とのコミュニケーションが学修成果の一部と関係している実態がうかがえる。もっとも、社会の出来事について意見を交換することは成績との間に統計的に有意な関係を見せないことから、学内に友人が居さえすればよいというわけではないようである。

現状では1年次と2年次以降との間に傾向の違いが見られる項目があり、これを前提として学年毎に学修成果の向上に関係する施策を講じることは可能かもしれない。しかしながら、1年次は学外の友人と過ごす方が楽しい学生ほど成績が良い傾向が見られるからといって、学内のコミュニティー形成を支援しないとすれば、大きな問題を抱えることになり得ると考える。なぜならば、学内にコミュニティーが構築され、その一員としてある種の居心地の良さを感じられる環境を学生が持つことは、2年次以降の学修成果にプラスの影響を与え

るかもしれない。学修成果の側面のみならず、大学に対する愛着の醸成や不測の事態が発生した時の対応等で学内のコミュニティーの意義があれば、結果として大学側にもメリットがあると考えられる。そのため、各学年の実態を把握すると同時に、対策を講じる際には大局的に検討する必要があるであろう。

そこで、学修成果の比較的高い学生を対象として、学内コミュニティーにおけるコミュニケーションについてインタビューを行った。次節ではその内容を踏まえ、学内コミュニティーと学修成果との間にどのような実態があるのかを探索的に検討していく。

3. インタビュー調査

学修の成果をあげている学生は、学生生活にどのような特徴が見られるのかを探索的に調査するため、GPA が比較的高い 2 年生の学生を対象に、筆者らは 2015 年 9 月下旬から 10 月上旬にかけてのべ 10 名、合計 5 時間のインタビューを行った。インタビューは、2 名は個別に 1 時間程度、残りの 8 名は 4 名まとめて 1.5 時間程度、実施した。インタビュー形式に個人と集団を織り交ぜたのは、個人であれば話しやすいことと、学生同士で会話しながらであるからこそ想起されることがあるのではないかと考えたからである。今回のインタビュー調査は、筆者らの素朴な感覚として「成績が良い」と思われる GPA3.0 以上の学生のうち、プレゼミや学科内イベントを通じて接触の機会が多く教員とのコミュニケーションになれている学生を対象として恣意的に選択した。従って、何らかの基準に従って体系的に学生が選ばれたということでは必ずしもないが、ある種の学生の実態を質的に捉えるものであり、定量的な実態調査を補うものであると考えられる。

インタビューを通して、高い学修成果を修めている学生は、1 人の例外もなく試験前のみならず授業にも積極的に出席し、熱心に勉強に取り組んでいる実態がうかがえた。このことは驚いてはならない結果ではあるが、勉強すれば成績がよくなるという全く当然の結果がしっかり裏付けられたことは教員として安心できる。しかしながら、なぜ勉強を行うのかという質問に対しては、学生によって様々だった。将来の負担や勉強の面白さなど様々なことを動機としてあげてくれたが、唯一例外的に全員が共通して語ってくれたのが、「グループ」というコンセプトである。以下、発言を引用しよう。

「（同じグループに存在する成績優秀な）A ちゃんとか B ちゃんがいるじゃないですか、彼女たちにばかにされたくないんですよね」

「仲のいい友達からの視線が気になるじゃないですか。『あいつ、分かってないんだ』って。」

「勉強してないで成績悪くなったら、一緒に勉強するときにグループの足手まといにされると思うから、そうならないようにちゃんと勉強しますね。」

「私たちのグループは、私以外はみんな頭がいいから、ちゃんとやっていかないと置いて行かれちゃうんですよね、それがいやで」

これらのコメントは、固定的に仲の良い友人たちからどのように見られるのかを学生が気にしていることを示している。特定の誰かではなく、グループの友人たちに頭が悪いと思われたくないために勉強をするという動機である。社会に存在する集団の多くは、その構成員の間に何らかの共通点を持ち、それ故に集団に所属することの居心地の良さを感じるものとなる。特に日本人の場合、集団内の多様性を認めるよりも同一性を求める傾向にあり、そのことがいじめを引き起こしていることを指摘する研究も存在する。大学内で形成される集団が成績という基準だけではないことは明らかではあるのだけれども、学内の友人に成績上位者が複数いれば、勉強ができないことが集団内の異質な存在となってしまうのではないかという恐れを感じているのかもしれない。集団内で相互に排除を恐れると、自然と勉強量が増えるのかもしれない。

異質性の排除が結果として成績上位者の学修を結果的に促進しているとしても、その学生の周辺では望ましい結果を生み出すメカニズムではあるものの、反作用もある。たとえば、次のようなことを述べる学生もいる。この学生は、いわゆる成績があまり良いとはいえないグループに属しており、1年次の成績はそれほど良くなかったが、2年次移行に飛躍的に成績を伸ばした学生である。この学生に、「なぜいつも後の方で授業を受けるのか」と聞いたところ、以下のように語ってくれた。以下は、いずれも同じ学生の発言である

「みんな後の方に居るし、誘ってもみんな行かないと思う。（なぜ？という筆者の問いかけに対して）私たちがずっと後の方で授業を受けてることはみんな知っているから、急に前（の方の座席）で授業受けたら、”なんで後ろのヤツが急に前に来るんだ”って嫌われると思うし、私たちが前の方に行くと嫌な思いもさせると思うし」

「（ある必修授業で）座席指定で前の方に（強制的に）座らされたときは、先生が指定したことだから周りも何とも言わなかったし、先生ともいろいろ話せたから楽しかったけど、やっぱり前はないかな」

この学生は、二重の意味で学内コミュニティーの眼を気にしていることが分かる。第一に、一人だけ前に行くわけにもいかないという点は、いつもいる友人と離れて行動することへの懸念であり、第二に、いつもいる友人ではなく、それ以外の学内の学生から普段と違う行動を取ることに対する眼差しを気にしていることである。この学生が普段から仲良くする友人達は平均的な成績を修める学生達で、その集団を支える共通項が大学の成績そのものにあるわけではない。そのため、インタビューを行った学生の成績が平均以上であっても、友人達の間で異質な存在として認識されるわけではない。個人の成績は本人が開示しない限り他者は分からないものなので異質性を認識されないとも言える。だからこそ、行動として表出する講義室内の着席場所については気にしていると考えることができよう。

これらの内容は、質問票調査では得ることのできない学生に対するインサイトを提供していると思われる。2 年次には、学内コミュニティーの存在が学修成果と正の相関を持つことは定量的なデータから理解することができたが、なぜコミュニティーで過ごすことと成績の間に関係性が見られるかというと、否定的動機が根源にあることがインタビューから示唆された。すなわち、自分が授業内容を理解できないと、学内のコミュニティーで居心地の悪さを感じることになるから、そのようになりたくないという動機から勉強に取り組み、結果的に学修成果が高くなっているということである。

「コミュニティー」を重視する学生は、成績優秀者に限らず多いようである。例えば学生たちがゼミやプレゼミを選ぶ際には、内容や教員のみならず、そこにどのような学生が集まるかも非常に重要視していた。以下は、インタビュー中の雑談としてゼミ・プレゼミの志望理由を聞いた際に語ってくれた発言である。

「宍戸先生の授業が凄く楽しかったから宍戸ゼミに行きたかったけど、宍戸ゼミを受けるひとたちとは合わなそうだと思ったから他のゼミにしました」

「積田先生のゼミは凄く負担が重いと先輩たちが言っていたので、それなら変な人たちは来ないだろうと思って選びました」

「（内容が特に似ていると見なされている）渡部先生と積田先生で初めは迷ったけど、公開ゼミで先輩たちの雰囲気を見比べてすぐに渡部先生に決めました」

これらインタビューの発言は、教員がどこまで学生と関わるべきかという問題について、ヒントになりえるかもしれない。学生は、勉強する理由としても、ゼミやプレゼミを選ぶ理由としても、教員についてはあまり言及しなかった。学生側からは、同じコミュニティーの一員としては見なされていないようである。インタビュー対象学生が 2 年生であり、まだ過ごした時間が少ないこともあるため、今後は対象学生を 3 年生・4 年生にも増やして比較していきたいと考えている。

4. まとめ

以上が、筆者らの質問票調査とインタビュー調査に関する分析である。筆者らは教育学・教育心理学の専門家ではないために、既存研究の知見にしっかりと立脚するというよりはむしろ、教員としての素朴な疑問や仮説に立脚して網羅的・探索的にはばひろく調査したため、回帰分析など因果の解明に踏み込むまでには現時点では至ることができていない。しかしながら、現在、渡部と積田は学院特別研究費より支援を受けてこの調査を継続している最中であり、今回の知見を基礎に今後さらに、調査を発展させて行きたいと考えている。

欠点は数多いと自覚しているにも関わらず、筆者らが FD 等で調査結果を積極的に発表している理由は、このような調査により学生「たち」のこれまで知らなかった姿をしっかり見

ることが、教育を改善していくための第一歩となりうることを示したいからである。今回の調査では、学生の「グループ意識」が学修に多大な影響を与えることが明らかになり、それは少なくない先生方にとって新鮮な結果なのではないだろうか。

またもう一つの理由としては、この種の調査はサンプルが大きければ大きいほど役立つ結果が得られるものであるため、もしかして連携が可能な先生方がいらっしゃればぜひお声がけして欲しいと考えたからである。本稿でも簡単に述べたが、武蔵野キャンパスで4年間を過ごす学部学科とキャンパス移動が生じる学部学科では、グループ意識に何らかの差があるかもしれない。違いは存在するのか、あるいはそれが成果に何らかの影響を及ぼすのかどうかは、比較からしかみえてこない。

またさらなる理由としては、本稿をお読みになって頂いた上で、何らかのアドバイスを頂くことができたら嬉しいからである。筆者らは、質問票を作成する際にも、また分析する際にも、人間科学部の北條英勝先生に様々にご助言・ご支援頂いた。筆者らはいずれも学生と年齢的に近いというアドバンテージがある一方、教員としてのキャリアが未熟なため、学生たちについてよく知らないという不利も大きい。こうした点を克服するためにも、先生方から何らかの機会にコメントを頂けたら幸いに思う。「教員を信頼しているかどうかはGPAにほとんど影響しない」といったショッキングだが本稿では公開していないデータも多々あるため、もし興味を感じられたら、ぜひ、ご連絡頂ければ幸いである。

学生の成長に貢献したいという教員としての熱い思いが必要であることは間違いないのだけれども、学修成果の向上へつながる施策が適切に講じられるためには、このような調査を通じて得られる学生の実態把握とその蓄積がまずは必要であると筆者らは考える。理想と実態の両面を描けた上で様々な取り組みへと展開していくためにも、実態調査を積み重ねて課題をあぶり出していきたい。

註

1） Boredom and Engagement: Moderated Mediation Model of Academic Boredom, Leisure Boredom, and Study-Leisure Conflict (2015 International Conference on Education, Psychology and Society)

2） たとえば、2015年11月2日武蔵野大学第4回FD研修における結果の一部発表。

3） 調査実施時点では学科設置3年目であったため、3年生までの3学年575名（1年生224名、2年生176名、3年生175名）が対象である。

4） 追加で得られた回答のうち132名分は、新年度の授業初日に質問票調査を実施していることから、進級後の大学での学生生活が与える影響はほとんどないと考えられる。なお、追加回答者の学年は進級前のものとして統一している。

5） 友人とのコミュニケーションに関する質問項目の1つは、2年生ならびに3年生のみを対象とした項目である。

6） 既に述べているとおり、不合格単位の割合が大きければGPAは低くなるため、両者の関係は負である。